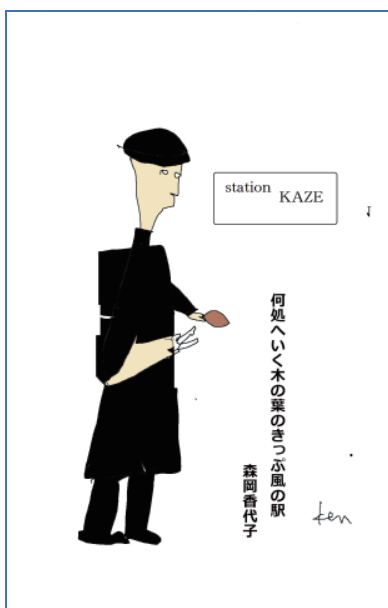


■今月の特選句

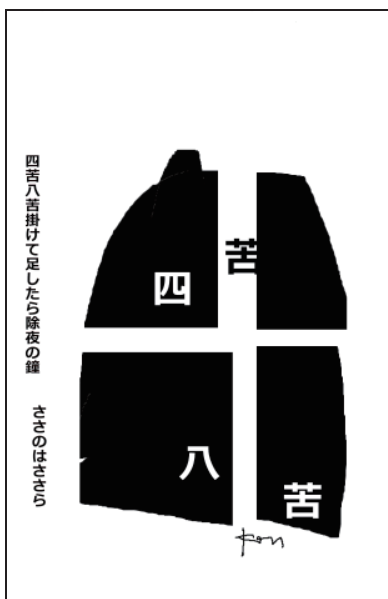
2025年1月



何処へいく木の葉のきつぷ風の駅

森岡香代子

枯葉は一陣の風に吹かれて駅を離れてゆく。しかし、次の駅がどこなのか、終着駅がどこなのかは知らない。風の駅の駅長さんに聞いてみますか。



四苦八苦掛けて足したら除夜の鐘

ささのはささら

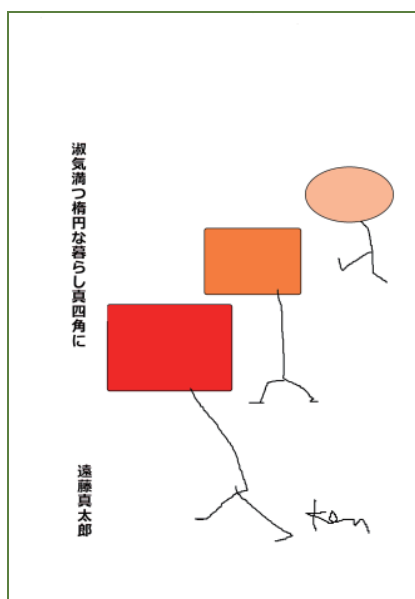
本当のような嘘をつくのが文芸とするなら、この句はまさに「文芸」である。除夜の鐘は百八つ。この句で、煩惱の数とされている根拠が判明したね。



値上げに遅配それでも出します年賀状

南とんぼ

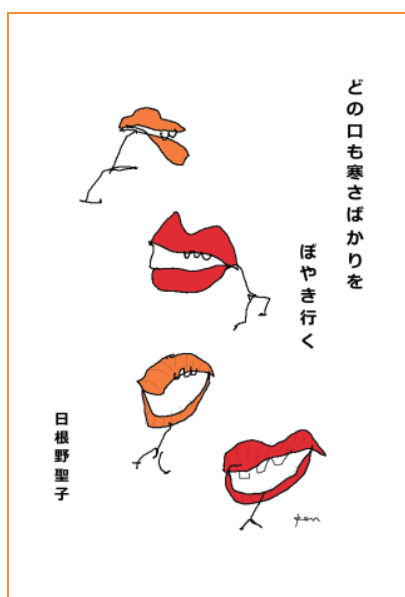
年賀状を書く人より、書かない人の方が多くなっている。「年賀状じまい」という言葉もよく見かけるが、迷いなく「出します」の宣言が嬉しいね。



淑気満つ楕円な暮らし真四角に

遠藤真太郎

淑気の緊張感を視覚化した巧妙な句である。言葉の抽象を言葉で具体化することは難しいのだ。なかなか使いこなせない高度な技の句である。



どの口も寒さばかりをぼやき行く

日根野聖子

「寒いね」「冷えますね」。交わされる挨拶を俳句的に俗な表現をするとこんな句になる。「どの口もぼやく」と川柳的なところが俗っぽくていい。



浅漬や時短時短の流行る現代

ほりもとちか

何をするにも効率が優先される現代を「浅漬け」並みだと皮肉っている。俳句もこんな風に社会時評できると後世に生き残る可能性が出てくる。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

ふくろうは見てる過去現在未来
・・・首をぐるりとまはしてゐるね

谷本 宴

吹けば飛ぶようなプライド鰯雲
・・・矜持を教示してあげませう

永井流運

勝つよりも負けじと思ひ冬構
・・・負けるが勝ちといふ瘦せ我慢

岡本やすし

秋の蝶やぶれかぶれに飛んでをり
・・・蝶には蝶の事情があらむ

尚山和桜

初冬の季語を重ねる着ぶくれて
・・・句会に出ても身動きとれず

沖枇杷夫

作るから買うに変身せち料理
・・・結局買った方が安くて

花岡直樹

湯豆腐や卓の向かひの空けてあり
・・・なにやらドラマの始まる気配

花畑つくし

焼鳥の暖簾気になる冬初め
・・・気になるときはちよつと寄り道

吉川正紀子

ホットワイン啜る慣れない口づけのように
・・・慣れた口づけワインがぶ飲み

桑田愛子

友をもてなす間引菜の大根汁
・・・さり気ないから負担にならず

桜井美千

着ぶくれて薬の嵩(かさ)のまた増えし
・・・瘦せる薬もひと匙混ぜむ

三木雅子

紅マドンナ高値に皮を捨て惜しむ
・・・皮も食べなきや損した気分

小笠原満喜恵

七難隠し色白の雪女
・・・はつきりはせぬその目鼻立

稲葉純子

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

初霜に足跡をつけ菜を摘みに	相原共良
錦秋を誇るや尾根のななかまど	相原共良
年暮るる心の修羅を引きずりて	相原共良
除夜の鐘独りで聞くとうらぶれる	青木輝子
今年こそ積読制覇読みはじめ	青木輝子
噛み合わず右と左の恵方道	青木輝子
紫式部むらさきを零しをり	赤瀬川至安
綿虫の雪婆んばとも呼ばれたる	赤瀬川至安
股引のなんたるズボラ七日間	赤瀬川至安
ぶらさがる瘦せつぼつちの干大根	井口夏子
そぞろ寒絆創膏の傷口は	井口夏子
冬の雨メロノームになつてゐる	井口夏子
小春日やまつ黒猫の名前ポー	池田奈美子
人伝に元気であると冬ぬくし	池田奈美子
京に来て生湯葉生麩酢茎買ふ	池田奈美子
七五三親子それぞれ相似形	池田亮二
天高し幼稚園児みな芸術家	池田亮二
冬ざれや長い一年あと少し	伊藤浩睦
コットンと落ちて綿虫掌に	伊藤浩睦
炬燵の尻猫を叱るも糠に釘	伊藤浩睦
ぶるぶるぶる霜柱の一夜漬け	稲葉純子
除夜の鐘打つ度ごとに一喜一憂	稲葉純子
断捨離の本に千円冬ぬくし	井野ひろみ
時雨るるや予想通り相合傘	井野ひろみ
終活に取り越し苦労木の葉髪	井野ひろみ
小春日やクレーンゲームに勝利して	上山美穂
メレンゲをスプーンで並べうろこ雲	上山美穂
星凍てて絵本は指を弾ませる	上山美穂

夫の留守心静かに毛糸編む
運慶の仏像の眼に冬の星
寝酒はヌーボー夢ではパリジェンヌ
両の手はポケットに避難冬寒し
水道の水が教へる冬間近
草紅葉先づ色づきて秋の景
寝正月決意早くも色落ちし
ゴホンゴホンと声の調整初電話
向かう側日陰がなくて日向ぼこ
酉の市そろって値上げの屋台店
誰を待つポインセチアは真つ赤つか
身に入むや湯呑の温み手に包み
あぜ道が消えて聞かれず虫の声
茎の石普通の石に戻りけり
ショパン弾く美女のゆびさき月冴ゆる
日本列島こがらしといふ風吹かす
年の瀬やリタイアもせず頑張れり
大寒に備えよダウンは二枚着よ
取り込んだタオルが冬を冷たがる
風花に見惚れ(みとれ)運転大丈夫？
昔から晴れても寒い文化の日
参道の晴れ着が目立つ七五三
お豆腐のことこと煮えて湯気の中
蜂の巣の完成決めし者は誰
アキレスは踵を泉に浸け忘れ
師走なり学校長も年下に
師走なり特に変化も無くなりて
粧ふ山の奥へ奥へと送電線
神留守のゴミ収集車パソコンパソコン
露こぼる個人情報護美ばかり
欠札の友の消息漱石忌
ストーブのぼそぼそ灯りゆく朝
千枚を畳めば四千？蕪食ぶ

卯之町空
卯之町空
卯之町空
梅野光子
梅野光子
梅野光子
遠藤真太郎
遠藤真太郎
大林和代
大林和代
大林和代
小笠原満喜恵
小笠原満喜恵
岡本やすし
岡本やすし
沖枇杷夫
沖枇杷夫
加藤潤子
加藤潤子
加藤潤子
門屋 定
門屋 定
門屋 定
北熊紀生
北熊紀生
木村 浩
木村 浩
工藤泰子
工藤泰子
工藤泰子
くるまや松五郎
くるまや松五郎
くるまや松五郎

お散歩に犬は疲れて夕月夜
ふはふはの綿菓子べべに七五三
寒い身にコート着がさね閉じこもる
電線に三日月かかり秋夕べ
クリスマス飾りのキラリ病棟に
肩まで浸し真夜の仕舞湯冬隣
陽に透けて紅葉の紅は重なりぬ
落葉して窒息攻めの池の鯉
除夜の鐘猫がしきりに柱搔く
夫逝きて勤労感謝の日の淋し
柊のほろほろ白き香を零す
大根の太きを鹿に食はれたる
ポイントはお持ちですかと歳の市
母いまでも鬼畜米英開戦日
恩師逝く歳暮リストの名を外す
南瓜を掌に手秤上目遣いなり
日向ぼこ耳のそばだつ艶話
妻と祝ぐウイッグと禿頭初鏡
小春日や窓開け放ちスクワット
年金の暮らし勤労感謝の日
塩むすびやはり真ん丸鰯雲
母と行くふる里銀座年の暮れ
制服を脱いで変身クリスマス
引退のカーテンコール冬の蝶
吊るし柿ゆれるあの雲といっしょ
犬ほど鼻は良くないいっしょに歩く
ふてぶてしい膝小僧がかわいくて
浪曲の無形遺産や天高し
猛暑から突然冬と成りにけり
四万十川のブルーに映える落葉かな
忘年会鳥居ある露地を千鳥足
物忘れしても好物濁り酒
酒肴そろひて今日は冬安吾

黒田恵美子
黒田恵美子
黒田恵美子
桑田愛子
桑田愛子
桜井美千
桜井美千
ささのはささら
ささのはささら
佐野萬里子
佐野萬里子
佐野萬里子
敷島鐵嶺
敷島鐵嶺
敷島鐵嶺
壽命秀次
壽命秀次
壽命秀次
白井道義
白井道義
白井道義
鈴鹿洋子
鈴鹿洋子
鈴鹿洋子
鈴木和枝
鈴木和枝
鈴木和枝
高須賀溪山
高須賀溪山
高須賀溪山
高田敏男
高田敏男
高田敏男

今晚は播身ばかりよおでん鍋	田代輔八
二日目もぐでんぐでんにおでん酒	田代輔八
御代りや煮込みおでんは琥珀色	田代輔八
凧や自分に暗示かけて立つ	田中 勇
困り事の相談続く小春かな	田中 勇
雑炊を待つ人の列長々と	田中 勇
十二月おもちや売場は通らない	田中やすあき
猫舌の夫は出たきりおでん鍋	田中やすあき
鮫鰯切る大統領のやうな面	田中やすあき
大根煮るしばし世間の些事忘れ	谷本 宴
山積みのタスク見ぬふり日向ぼこ	谷本 宴
鯛焼の腹から粒あん主張する	月城花風
干大根鰯に共感手も顔も	月城花風
暖房の未だ効かぬも煮詰まる会議	月城花風
ひやらひやらひやらひやらひやら木の子散る	土屋泰山
隙間風何かが起こる気配して	土屋泰山
水洩をぬぐって遊んだ幼き日	土屋泰山
悪酔いも俳味と言はれ忘年会	百目鬼強
着ぶくれて海豹となる転つて	百目鬼強
施しなど要らぬわいと葱鮭汁	百目鬼強
秋の潮木の葉のやうな船に乗り	尚山和桜
言ひ訳は皆まで言ふな秋の暮	尚山和桜
爪切りに爪先遠き日向ぼこ	長井多可志
賑わひは唐突に今日鴨の池	長井多可志
冬ざるるアメリカ大使館の門	長井多可志
孫と入る柚子湯何年振りだらう	長井知則
異常気象師には及ばぬ師走かな	長井知則
孫のツリーに最近サンタが来なくなり	長井知則
初句会百寿の祖父は伸び盛り	永井流運
ショーヘイもイッペーもいる菊人形	永井流運

五人目の曾孫を得たり初紅葉
この孫と話す日はいつ初紅葉
ゼロ歳の曾孫九十四の我初紅葉
その手には乗つかありません赤蜻蛉
煤逃のどの面下げて宵の口
大漁の夢を肴に浜焚火
ロスタイム三日は欲しい師走かな
欲しいなあビールの蛇口をクリスマス
極月の二階に溜まる捨つるもの
年の市はや古びたる新紙幣
しぐれけり鶏舎は石灰振り撒かれ
勲章のちりめん皺や干大根
大豆干す白寿の母を待ち受けに
目玉焼き片目つつ分け今朝の冬
踊るかに揺れ干竿の干大根
湯の中で廻せば柚子の実目を廻し
電源を落とされたかに冬暮るる
十二月小走りとなる時間かな
煌々と射るが如くに冬の月
さんざめき暖を取り合う冬の星
冴ゆる月心の中を見透かされ
出迎への猫の鳴き声冬めける
保護猫の譲渡決まるや冬麗
どうとでもなる予定なり小六月
うそ寒や八十路迎へて知る我身
消えかけし飛行機雲の先小春
母の背で聞きしあの音虎落笛
これよりの真白き未来日記買う
金鈴子思ひ出したるやうに落つ
なで肩の西鶴像や冬近し
束ねたる髪の手まで風さやか
入院す三食昼寝温もり付き
木の葉散る中名残惜しやと退院す

長尾七馬
長尾七馬
長尾七馬
西野周次
西野周次
西野周次
花岡直樹
花岡直樹
花畑つくし
花畑つくし
浜田イツミ
浜田イツミ
浜田イツミ
久松久子
久松久子
久松久子
日根野聖子
日根野聖子
細川岩男
細川岩男
細川岩男
ほりもとちか
ほりもとちか
松浦百重
松浦百重
松浦百重
三木雅子
三木雅子
水本明日香
水本明日香
水本明日香
南とんぼ
南とんぼ

八面六臂草鞋二足へ年詰まる
世知辛きコスパ無視して年忘れ
請ふ大吉三度許せよ初御籤
秘匿性低きがよかる神は留守
セーターを抜けて濁世を見て終ふ
別れると言ひつ引つ張る毛糸玉
寒卵顔色変えずお湯の中
お陽様の甘さがこくて島みかん
出さずとも来れば嬉しい年賀状
七草の画像検索グーグルで
ぼちぼちがそろそろとなり冬支度
千年の祈りを鶴に託す人
顔見世や私の推しは三枚目
牡蠣ばかり揚げて複雑とんかつ屋
大マスク政局内にくぐもりて
宝くじ露けき夢の底支へ
貯めるより脂肪を減らし雪を掻く
出没の変幻自在かいつぶり
手秤でずっしり重き大根選る
水蛸の予約満杯年用意
夏雲を眼下に配す秋の雲
風吹かば冬支度する森の精
冬鳥の飛来に季節は冬となる
今朝の冬コーヒーの香を深呼吸
小松菜の美味を知らせる虫喰い葉
小春の日形見の紬身につける
裏作の柿丹念に皮をむく
退院の吾に嬉しい黄菊の黄
冬を実感白髪染の冷たさに
極寒のシベリア祖父の針仕事
冬菫母のすり足小刻みに
水鳥の足はシンクロスイミング
農協祭漢(おとこ)ら輪になり天高し
唐辛子種一粒に泣かされる

峰崎成規
峰崎成規
峰崎成規
椋本望生
椋本望生
椋本望生
森岡香代子
森岡香代子
八木 健
八木 健
八木 健
八塚一青
八塚一青
八塚一青
柳 紅生
柳 紅生
柳 紅生
柳村光寛
柳村光寛
柳村光寛
山下正純
山下正純
山下正純
横山洋子
横山洋子
横山洋子
吉川正紀子
吉川正紀子
渡部美香
渡部美香
渡部美香
和田のり子
和田のり子
和田のり子